

18世紀博物学に見られるジェンダー

三成先生 科研費合同研究会
2013年7月14日

三重大学人文学部
小川眞里子

存在する自然から、解釈する自然へ

- ・見ることも、聞くことも、脳に蓄積された情報と無関係に捉えられることはない。
- ・裸の事実は存在せず、すべての事実は理論依存的である。
- ・目の前の事実を、脳の情報と照合しながら、より合理的な説明を求めて解釈している。

自然は、真理が書かれた書物から
解釈をまつテキストへと

博物学の時代： リンネとバンクス



Carolus Linnaeus 1707-78
スウェーデンの博物学者
多くの弟子を世界へ派遣



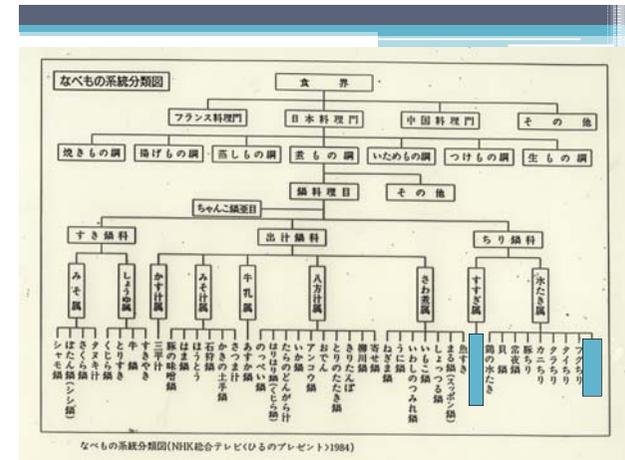
Joseph Banks 1743-1820
James Cookと世界を就航
王立協会会長 1778-1820

18世紀 博物学の時代

- ・天文学や力学は、17世紀までに一定の成果を達成し、続く18世紀は、異国の動植物を含め、**自然の事物**に対する関心。
- ・博物学は新しい知識の到来であり、**ビッグビジネス**の機会でもあった。
- ・東南アジアや南北アメリカから運び込まれる珍しい動植物の洪水に、神の**被造物目録**の全面改訂の必要。
- ・砂糖、タバコ、ゴム、香辛料、医薬品など、数々の**商品作物**。

18世紀は、分類の世紀

- ・東南アジア、アフリカ、南アメリカ、さらにはオーストラリアから、さまざまな動植物がヨーロッパに → **新しい分類の枠組みの必要**。
- ・動物や植物のみならず、人間も。
- ・博物学という題材の見えやすさ、分かりやすさ。
- ・何に注目して分けるかを考えると、分類というのは、かなり恣意的なものである。すなわち解釈の入り込む余地がきわめて大きい。



分類の恣意性

- ・分ける基準によってどのようにも分けられる。
- ・ただし、よい分類とは、つぎの条件を満たすものだろう。

論理的区分の規則

- ① 区分の視点の一貫性
- ② 区分枝の排他性
- ③ 区分枝の網羅性

18世紀の分類を次の3つで考えよう

植物の分類

- ・リンネの『自然の体系』
- ・性に注目した植物の分類

動物の分類

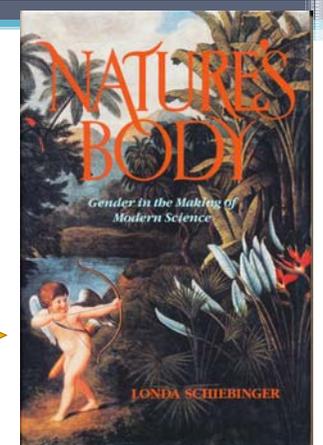
- ・『自然の体系』第10版
- ・ママリアはなぜママリアに

人間の分類

- ・何で分類するか
- ・白人男性優位な分類

キューピッドは
何をしているの？

植物が
恋!!!
植物が
セックス!





『フローラの神殿』 植物に愛を 射込むクピド

愛の神クピドが矢を射込むのは、植物学者ジョゼフ・バンクスが南アフリカから持ち帰りシャーロット王妃にささげた名花ストレリチアであり、当時の植物学的発見のシンボル。

植物の分類

植物にも性がある！

植物のセクシュアリティは17, 18世紀に突如浮上

それまで美しい花を台無しにする花の排泄物と思われてきた塵が実は花の最も高貴な部分と考えられるようになった。

花びらは婚礼の床。それを創造主はみごとにしつらえ、高貴な帳で飾り、甘い香りを添える。花婿は花嫁を伴いとも厳肅に婚礼を執り行う。床が準備されたら、花婿は可愛い花嫁を抱き贈り物（花粉）を捧げるのだ。

リンネ『植物の婚礼序説』(1729)



雄しべ・雌しべと言うけれど

生殖と無関係なラテン語名称

- Stamen (織物の縦糸の意)
- Pistil (すり粉木状の乳棒)

日本語に翻訳されたとき、雄しべと雌しべという名称に

Nehemiah Grew (1641-1712)

『植物の解剖』(1682年)

ペニスと雄しべとの形状の比較

→「あらゆる植物は雄か雌」と認識



伊藤圭介
1803-1901



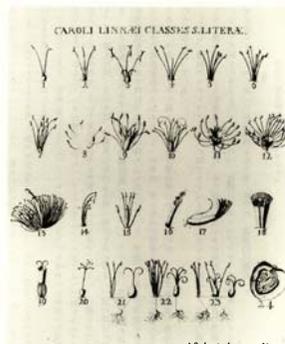
日本最初のリンネ分類学の紹介書



伊藤圭介
(1803-1901)
1829年刊行

複製版 筆者所蔵

性に注目した分類とは言うけれど



ゲオルク・エイレットが作成したリンネの性体系(Nature's Bodyより)

雄しべを基準に、次に雌しべか
雌しべを基準に、次に雄しべか

男性優位な社会に
暮らすリンネにとって
雄しべの優先は当然

次に見るように
たしかに植物採集には便利
ただし、花が咲いていれば

『牧野新日本植物図鑑』から



植物の科と雄蕊の数の間には特別な関係がない。

雄しべの数で綱、雌しべの数で目 リンネの体系はきわめて人為的

生殖器官に焦点を
定めているが

- 自然な類縁関係を示すものではない
- 基本的な性機能は捉えておらず、形態的特徴に注目しただけ

それでもリンネの体系が歓迎されたのは

背景に

- セクシュアリティへの関心の高まり
- 恋愛結婚の普及
- 近代ポルノグラフィの成立

リンネの分類の普及によって失われたものは

ユリの花といえども



白百合で検索すると、幼稚園、女子の小中学校、女子高校、女子大学のオンパレード。

ダ・ヴィンチの受胎告知

大天使ガブリエルの持物に注目



何が科学的なのか

長年人々が植物に付してきた文化的、医学的、社会的なさまざまな意味づけをすべて剥奪した人為的な区分

植物の薬効成分や、調理法や産地、栽培方法などを長々と記した記載は科学的でなく、2雄しべ綱1雌しべ目というのが科学的なのだろうか。

リン・ハント編著『ポルノグラフィの発明』

(ありな書房 2002年)の巻末の解説

- ポルノグラフィは超歴史的な不変物ではなく、**歴史的構築物**である。
- ポルノグラフィは西欧初期近代から近代にかけて、世界観の変化を示す出来事と連動しつつ立ち現れた「**特殊な歴史と地理的空間に誕生した西欧的概念**」
- ハントによれば、性の快楽のみを目的とするポルノグラフィが出現するのは、**18世紀末から19世紀の初頭**にいたる数十年間という。

見当違いにオス化されたハチ



国を支配するという社会的機能は産卵するという生物学的機能より重視されていた

アリストテレスの時代から18世紀半ばまで、王バチ巣を支配し続率する君主は端的に雄でなければならない



王の退位

女王バチの誕生 産卵の強調

ウィリアム4世



リンネの性の体系 植物の結婚

エイレットの分類表からは想像もつかないメタファー



千葉県立中央博物館『リンネと博物学』2008年 文一総合出版より

性差観の科学革命

- 一性モデルから二性モデルへ
- 植物と動物のアナロジー
- リンネの体系が流行ったのは、偶然でも才能でもない。
- リンネは生殖器を植物の最重要器官とみなした。
- 分類区分にセクシュアリティを採用。

動物の分類

- 植物と違って、雌雄の区別があることについては、当然とされていた。
- 動物の場合はともかく、人間において女性は、男性の出来損ない、熱の不足で性器が体外に出ないままに留まった未成品と考えられた。
- 別格とされ、分類の外に置かれていた人間の扱いをどうするか。
- 論争の的になった分類項目は **四足動物**

18世紀半ばに誕生した分類名

乳房動物 *Mammalia* は、なぜ *Mammalia* に？

- 紀元前3世紀から18世紀まで、ほぼ2000年間アリストテレスの四足動物 *Quadrupedia*
- 18世紀になって、四足動物に代わる分類名が模索されはじめた。

カエルやトカゲが一緒でよいのか、コウモリやクジラをどうするか？

四足動物に替わる分類名は？

18世紀の有力候補

胎生動物 *Vivipara*
被毛動物 *Pilosa*
乳房動物 *Mammalia* を提案



けもの日本語の獣はまさに毛物なのです

今日ではその他にも分類指標が挙げられる
側頭鱗と歯骨によって形成される顎関節
鼓膜と内耳をつなぐ3つの耳小骨
歯根が分岐した白歯(異形歯性)
2心房2心室



これらは、ほぼ等価でどれも哺乳類と称する動物を括れる

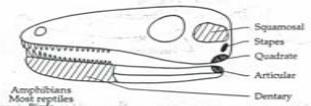
哺乳類の特質

- ① mammary gland
- ② 側頭鱗と歯骨によって形成される顎関節
- ③ 鼓膜と内耳をつなぐ3耳骨（槌骨・砧骨・鎗骨）
- ④ 体毛または毛皮がある
- ⑤ 体循環に左大動脈弓のみ（2心房2心室）
- ⑥ 歯根が分岐している臼歯

各種のサメ



両生類
爬虫類
鳥類



哺乳類型爬虫類



哺乳類



骨の配置

側頭鱗
あぶみ骨
砧骨
槌骨
歯骨（下顎の膜骨）

ルソーの嘆き

『エミール』(1762)から

- ・自然に反する乳母制度の浸透によって、母たちは子どもを自分で養育せず金で雇った女に預けている。
- ・女は授乳をしなくなったばかりか、子どもを作ろうともしなくなった。

乳母制度全盛期

1800年ころのバリの乳母給所風景
パリやロンドンでは生後間もない赤ん坊の9割もが、田舎の乳母に送られた。
高い乳児死亡率



Bureau des nourrices, Paris, 1800. Fildes, *Breasts Bottles & Babies*

高い乳児死亡率を
いかにして下げるか。

18世紀後半の識者の重大関心事！

エリザベート・バダンテール 原著1980年 『母性という神話』 鈴木晶訳 ちくま学芸文庫

1780年、パリ警察庁長官ルノワールは、残念そうに、次のような事実を認めている。毎年パリに生まれる21000人の子どものうち、母親の手で育てられるものはたかだか千人にすぎない。他の千人は一特権階級であるが一住み込みの乳母に育てられる。その他の子どもはすべて、母親の乳房をはなれ、多かれ少なかれ遠く離れた雇われ乳母のもとに里子に出されるのである。

母性愛とは女にはじめから備わった自然や本能ではなく、近代が生み出した歴史的産物にすぎない。



Figure 1.1. Parishes known to accept nurse children from London, 1539-1800. (● = parishes buying large numbers of nurse children.)

ロンドンからの里子の受け入れ教会区
1538-1800

Valerie Fildes, *Breasts Bottles & Babies* Edinburgh University Press, 1986

雌トラや雌ライオンをお手本に

- ・開業医だったリンネは、1752年に乳母制度の弊害を説く論文を執筆。
- ・リンネの『自然の体系』第10版（1758年）に登場する分類名（綱名）*Mammalia* ママリアは、圧倒的支持を獲得。
- ・*Mammalia*に人間も分類。
- ・重商主義を背景に、労働力増大への期待

私たちが
乳房動物

ルイ15世の侍医 ジョセフ・ローリン

子どもは国の宝、王国の栄光、帝国の活力であり財産

国家にとって人口は重要

再びバダンテール『母性という神話』から

- ・子どもは、とりわけ18世紀末になって、商品価値をもつようになった。
- ・人間は国家にとって貴重品になったのである。人間が富を生産するからだけでなく、国の軍事力を保証してもいるからだ。
- ・10人の子どもを育てた家族の父親には人頭税の免除。20歳までに結婚した男子に税法上の便宜。
- ・捨て子の利用・・・植民地へ輸出、軍隊へ送る。

乳母制度廃止の正当化

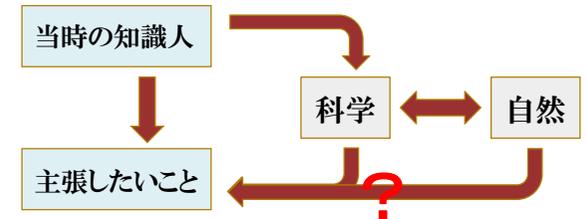
リンネの用語は、動物も人間も女性が母乳で子育てすることが、どれほど自然なことかを強調することによって、ヨーロッパ社会の再構築を正当化。



女性に対する強力なメッセージを内包した分類名
ママリアは18世紀の社会が選び取った綱名

ジェンダー中立

18世紀の博物学は価値中立だったか？



科学言説を採用することによって
自然が命ずるところだと思わせているところがミソ